志向と成功

異国の地で映画俳優を志向していた朴基柱は
祖国の懐に抱かれて人民俳優、
三大男優になった。

志向と成功

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ112(2023)

はじめに

思い出に残る映画や傑作とされる映画は、俳優たちの演技を抜きにしては考えるべくもない。

名優は、その生活体験とファンタジー、創造的な才能をもって作品の形象化を豊かに広げていく。

人々は映画を観て人物の名をすぐ覚えることができなくても、俳優誰それが演ずる役だと言ったらたやすくその人物を思い浮かぶことになる。

朝鮮の劇映画部門には、才能豊かな俳優に成長し、観客に親しまれている名優が少なくない。

その中には、常に個性ある演技をもって多様な役を見事にこなすことで、多才多能な俳優として広く知られている人民俳優朴基柱（パク キ ジュ）もいる。

俳優朴基柱の名を聞くと、人々は何よりも先にその姿形に思いを致す。

普通のありふれた体躯に、あまりぱっとしない容貌、寡黙な性格などと、どの面から見ても俳優の通念とは程遠いのである。

ところが彼は数十編の映画に出演して、主役や脇役

などさまざまの役を担当し、生き生きとした演技を見せ、晩年には朝鮮の3大名優の一人に数えられるほどになった。

日本の地に生まれ育ち、苦労という苦労をなめつくした彼の生活体験は、社会主義祖国に帰国して映画界入りの念願を果たしたあと、わが演技の熟達に大きく役立ち、名優としての頭角を現す貴重な礎となった。

過去の薄幸な朝鮮青年朴基柱が祖国に帰り、金日成(キムイルソン)主席と金正日(キムジョンイル)国防委員長の温かい懐に抱かれて、どう祖国と人民に愛される人民俳優に成長したかをリアルに語る本書『志向と成功』を一読されるよう、日本の皆さんにお勧めする。

目　次

1．祖国に帰り

念願を果たす

悲運にあえぐ受難者の子として異国の地日本に生まれた朴基柱は、幼少の頃から周囲の人々の蔑視にさらされながら生きた。

彼は、1939年1月3日、滋賀県のある小さな鉱山村で生まれた。父親は徴用で朝鮮から引っ張られてきて、鉱山で強制労働にさいなまれた鉱夫であった。

日本に渡った朝鮮人すべての例にもれず朴基柱の一家も生活難にあえいだ。

一人息子の基柱は少年時代から鉱山で働く両親を助けてあくせく働いた。

母親は夜が明け切らぬうちにわが子を起こし、服を着せて古バケツを持たせ、さめやらぬ目をこすりながら暗がりの中に消えて行く基柱の後姿を涙ながらに見送った。少年は駅舎の辺りで、蒸気機関車から捨てられた石炭の燃えがらを探して歩いた。暗がりの中でまだ熱い燃えがらを木切れで掻き分け、その冷めるのを待つ。そこ

には栗粒ほどのコークス炭があるのである。

毎朝、小学校へ登校する前に少年がなすべき仕事は、このコークス炭を拾ってくることであった。家には石炭とか薪を買うだけのお金もなかった。だから少年がたとえ一日でもこの仕事を怠けると、炊飯ができず、室内の暖を取ることもできなくなる。コークスがバケツ一杯なら1日間の燃料に心配しなくてもすむ。まれにはバケツに二杯ものコークスを拾うことができた。そんな時は、一バケツのコークスを売ってお金に替えておく。

生活難にあえいだ母親は、ときどきお金が足りなくなると、どうしたらよいかとため息をつく。そんな時、少年がコークスを売って溜めておいたお金を出して見せると、母親はにっこりした。暮らしのやりくりで一日として気が休まらない母親の表情にそうした明るい色が表れると、少年は本当に嬉しかった。だから彼はいかに眠たくつらくても、また指にやけどができても一向気にかけず、一粒のコークスでも余計に見付けようとして頑張った。

そんな苦労はさして苦しいとは思わなかったが、耐え難かったことは、コークスのバケツを下げて帰る途中、同級の日本人少年たちに出会う時だった。

彼らは朴基柱を「石炭乞食」と呼んでばかにし、力が強くて荒っぽい少年は、彼のバケツを蹴ってコークスをば

らまいたりもした。それらを一つひとつ拾ってバケツに入れる基柱は、両親が祖国から日本にやって来たせいでこんな苦しみをなめることになったと考えて悔し涙を流した。

10歳を超えた年頃には、この悲惨な境遇に耐え難い思いをしながらも、これが自分の運命だとあきらめもし、時にはなんで自分たちは自国で暮らさずに他国へ来て苦しんでいるのかと両親に向かって愚痴ることもあったが、せんないことだった。

朴基柱の親だけでなく、おびただしい朝鮮人が徴用や徴兵、それに人夫の募集という甘言にだまされ、はたまた生きるすべがなくて各地をさまよったあげくの果てに日本に渡り、民族的差別に苦しみながら生き延びていかざるを得ない痛ましい現実、常時極貧の生活にあえぎながらも子を産み、その子らに悲哀の代を継がせるみじめな現実。これがほかならぬ曲折に満ちた朝鮮の歴史が生んだ悲劇だということをはっきりと知ったのは、朴基柱が朝鮮中高級学校へ入学してからだった。

日本の小学校を卒業した朴基柱は、総聯(在日本朝鮮人総聯合会)の教育会傘下の愛知朝鮮中高級学校に入学した。自分が朝鮮人だという根本的な自覚を抱き、たとえ祖国の土は踏めないにしても、自国の地理や歴史、言葉や風習を学びたいという一念からであった。

学校の教員たちは、生徒たちに祖国についての知識を熱心に教えた。とはいえそれは、祖国をあこがれる朴基柱の心を揺さぶりはしても、祖国の土を踏みたいという念願をかなえるまでのものではなかった。

中高級学校時代は朴基柱にとって、俳優への夢をはぐくんだ揺籃期であった。学校の演劇部に入った彼は、自分には俳優の素質があると確信し、いずれ演劇俳優になろうとの夢を抱いた。

けれどもそれはあくまでも夢にすぎなかった。学校の卒業と同時に、彼は失業者になった。お金がなくては芸術学校に入れるわけがなく、どこかの演劇団か映画撮影所に雇われて下働きなんかをしながら俳優の基礎を磨いてみようともしたが、朝鮮人のせいで受け入れてもらえなかった。当時はまだ朝鮮大学校もなかった。

希望や抱負は一場の夢にすぎず、口に糊すべき手立てもなかった。日本の地で金もなく、手づるもない彼のような朝鮮青年が何かの仕事にありつくことは、空の星を取ってみようというようなものだった。1年近くも失業者の群れに混じって街頭をさまよった末、鉱山村に帰った彼は、建設工事場に砂や砂利を運ぶトラックの運転助手の口を得た。こうして毎日汗にまみれて働きながらも、演劇俳優の夢は捨てなかった。

そんな時、彼には祖国の映画を見る機会があったが、それ以来、演劇よりも映画俳優にあこがれるようになった。彼が最初に出合った祖国の映画は『郷土を守る人たち』であった。

当時、この映画が上映されると、日本当局はそのフィルムを没収する挙に出た。

そのことを知った在日朝鮮人アーチストをはじめ、各地の朝鮮人はただちにフィルムの奪還闘争に立ち上がった。この映画フィルムの奪還闘争には、朴基柱が居住している地域の朝鮮人たちもこぞって参加し、たたかいには本州のほとんどすべての地の朝鮮同胞が合流し、遂に奪われたフィルムを取り戻した。

その後、劇映画『偵察兵』『飛行機狩り組』など朝鮮の映画は日本に持ち込まれて、在日朝鮮同胞の中で広く上映された。

朝鮮映画は、在日朝鮮同胞の生活にとって切り離せないほどの道づれになり、彼らは互いに言葉を交わしても、映画の主人公のように話し、映画の中の肯定的人物のように振る舞った。同胞たちは、朝鮮のドキュメンタリーの画面で見られる山村の風景を見、映画から流れ出る民謡を聞きながらお互いの親交を温め、祖国への情を深めていった。

劇映画『郷土を守る人たち』のフィルム奪還闘争を

通して開かれた道は、帰国への航路とともに一層広くなり、映画だけでなく、朝鮮で創作されるさまざまの種類と形態の芸術作品が日本に紹介されるようになった。

民族的情緒にあふれた映画や歌謡などの文学芸術作品は、映画俳優を志す朴基柱の抱負をあおった。彼は先に帰国した同窓生たちから受けた、本人の希望により大学にも入れば、職場も与えられて自分たちの才能を存分に花咲かせているという手紙を読んでは、ひたすら帰国の念をつのらせた。

彼は両親に、自分たちも帰国しようと強く言ったが、両親は帰国はするが、国が統一した後、生まれ育った故郷、祖先の墓があり、親類たちのいる土地へ行くべきだとして、わが子の要望を受け入れなかった。両親の生まれ育った故郷は南朝鮮の慶尚（キョンサン）南道だったのである。

だが、それだけの理由なら何とか説き伏せることができたろうが、日本の俳優たちの生活がどのようなものであるかを彼らなりに理解している両親は、男児たるものが何を好んで卑しい芸人の端くれになろうとしているのかと叱責し、そんな希望は捨てろと言った。かてて加えて親しい友人たちも、君は映画俳優には向かない、それよりも数学の力にすぐれている君は数学を専門にして生きるべきだと勧めた。それに、「石炭乞食」とさげす

み、マスクも見るほどのない男が俳優になるとは笑わせるよ、などという日本人青年の嘲笑まで耳にした。

けれども、芸術への彼のあこがれと抱負をくじくことは誰にもできなかった。こうして彼は、一人で帰国しようと心に決めたが、すぐには実行に移せなかった。単独で帰国すれば、そこに親代わりになってくれる人もいないし、帰国しても映画俳優になれるかどうかという確信もなかった。それに自分をわが家の柱と頼む両親を日本に残して去れば不孝のそしりを免れないとして、決心を実行に移せなかった。

こうして何日も思い悩んだ末、朴基柱は、一生苦労の絶えなかった両親の心労を根本的にいやす方途は、自分が先に祖国に帰り、俳優への道が開けてから両親を迎えて孝養を尽くすことにこそあると心を持ち直し、1960年4月、第23次の帰国船に乗り、帰国の途に就いた。

長らく希望してやまなかった帰国への船に乗った彼は、数万言をもってしても言い尽くせない心のささやきを、心の中で港に歓送に集まっていた同胞たちと交わし、異郷でなめた屈辱の日々を振り返った。

やがて、帰国船は祖国の領海へ入った。

このようにして朴基柱は、自分のかけがえのない希望と理想を花咲かせてくれるであろう社会主義の祖国に迎え入れられたのである。

第　一　歩

文学芸術の道を志した人たちの誰であれ、追憶に残る最大の思い出は、その第一歩である。

最初から頭角を現したことで芸術への第一歩を踏み出した頃を楽しく思い返す人物もいれば、人知れず苦悩しながら一歩一歩前進し、晩年に至り大成する人物もいる。朴基柱はどちらかと言えば、後者に属すると見てよいだろう。

帰国当時、彼の目を見張らせたのは、チョンリマ(千里馬)時代の輝かしい現実であった。

当時朝鮮の国内では、金日成主席の賢明な指導の下、世人を驚嘆させる飛躍的な成果が相次いで達成され、全国の人民は親しみ助け合いながら暮らしていた。朴基柱の目に映る祖国は、世界のどの国にも見られないと思える地上の楽園であった。

鳩の気持ちは常に大豆畑に向けられているという言葉の通り、朴基柱の思いは相変わらず映画の世界と映画俳優たちに向けられていた。

彼は帰国した年の秋、平壌(ピョンヤン)演劇映画大学の入学試験を受けた。けれども結果は不合格だった。理由は朝鮮語が

弱すぎる、朝鮮語をはじめ受験の準備をしっかりした上で、改めて受験するようにということだった。実際、日本で生まれ育った彼は朝鮮語を自由に話せなかった。

けれども彼は少しも気を落とさなかった。端川(タンチョン)マグネシア工場で旋盤工として1年6カ月間働いた彼は、受験準備を着実に行った。さして長くない労働生活ではあったが、それは彼にとっては極めて貴重なものだった。

ここで彼は、祖国と集団のために誠実に働く労働者たちの姿に感動し、お互いに助け導き合いながら生きる社会主義制度下の人々の生活がいかにすぐれたものであるかを実感した。俳優を志す彼にとって、それは実に貴重な体験であった。

翌年9月、朴基柱は平壌演劇映画大学の入学試験に合格し、俳優科に入った。

前年、演劇学校から演劇映画大学に昇格した当大学に対する社会各界の関心と期待はかなり大きかった。大学の帽章やバッジを付けて街を歩いていると、大勢の人たちの目をひいたものである。彼はこの喜びを、日本に残してきた両親に伝えたくて、手紙を書いた。

わが子が大学入試に落ちたことで落胆していた両親は、この手紙を読んで大喜びし、父親は返事の手紙にこう書いた。

「なんとすばらしい世の中だ。国にただ一つの演劇映画大学に入学して勉強することになったとは。夢ではなかろうかと思っている。……学業に励み、天より高く、海より深いお国の寵愛を胸に秘め、祖国に忠実な働き手になるのだ。国の現実がそうだと知ったからには、このわしらもすぐに帰国船に乗る」

両親は手紙での約束を違えず翌年帰国した。

朴基柱は大学在学中、歴史、文化、自然、地理、道徳、風俗その他文学芸術に関する学問の習得に熱中した。朝鮮語の文学作品は残らず読もうと、これを大学期間の目標として一心不乱に勉強した。

元来中学時代から友人の本をしょっちゅう奪うようにして読んだことで、「本ぬすっと」というあだ名を付けられていた朴基柱は、大学時代、一日として本を手放すことがなかった。彼は友人たちが一度読んだらあきて投げ出すような本も、2度、3度と読み返した。

彼が大学在学中何よりも苦しんだのは、朝鮮語の発音を正確にできないことだった。帰国して間もない頃だったので無理ではなかったろうが、朝鮮語の正確な発音は俳優の演技にとって揺るがせにできないことである。大学在学中にこの問題を解決できなければ、わが抱負の実現は夢にすぎなくなると自覚していた彼は、2、3年内に

発音を正確にマスターせずにはおかないとして、これに取り組んだ。

朴基柱は講義が終わると、寮ならぬ俳優の稽古場に出掛け、アナウンサーの援助を受けて、話術の基礎知識を身に付け、発音法に習熟すべく努めた。時には夕食も取らずに人民アナウンサー李相璧（リサンビョク）の家庭を訪ねて、終夜話術の指導を受けもした。

そうした日々には、次のような話もあった。

当時、彼のクラスには、前途有望と目されている学友が少なからずいた。人なつっこくも機知に富む、大食家のパイロット出身全在演（チョンジェヨン）、勲功俳優沈英（シムヨン）の影響を受けて幼少時代から映画に出演して「ちびっ子俳優」の名で人々に親しまれた温和なソウル生まれの沈昇保（シムスンボ）、いつ見ても静かで穏やかな美男子の南浦（ナンポ）生まれの金光億（キムグァンオク）、瞳は青味を帯びて眼光は鋭いが、印象的な笑みを常に口元に浮かべている黄州（ファンジュ）生まれの鄭義謙（チョンイギョム）……。

後に名優に成長した彼らは、当時お互いに親しんではいたが、演技では誰にもひけをとるまいという野心を抱いていた。そういう彼らではあったが、日本から帰国した朴基柱に対して一様に格別な親近感を抱き、心から援助した。

ある日、学友たちの温かい助言に励まされながら寮で

夜遅くまで発音の練習に努めていた朴基柱が貧血を起こして床に倒れた。同室の学友たちは彼の蒼白な顔をのぞき、なすすべを知らずうろたえた。

幼い頃から苦労を続けたせいか、あまり丈夫でなかった彼が深夜にも発音の練習を休まず行っていたのだから、体が持たなかったのである。

しばらくして気力を回復した朴基柱は、彼らの手を強く握り、「そんなに心配することはないよ。ぼくは、ぼくが歩む芸術探究の道が祖国にいささかなりとも尽くしうる道になるなら、何度倒れても悔やむようなことはしない」と言って、またテープレコーダーの前に座った。朴基柱の胸は大学を終えるまでに演技の基礎をしっかり付けずにはおかないという一念に燃えていたのである。

こうした努力により、彼は2年後には、天にも届いているかと思っていた目標に到達して、朝鮮語の発音をスムーズに行えるようになり、大学の卒業作品で担当した配役の演技を立派にこなした。

大学を優秀な成績で卒業した朴基柱の胸は、人一倍大きな興奮に揺れていた。

2．諸名作に反映された創作的な個性

脇役にも力を入れて

映画界には最初からヒーロー役に抜擢されて活躍している俳優もいれば、脇役をもってその実力を固めている俳優も少なくない。

朴基柱は、映画俳優としての体格が十分でなかったばかりでなく、マスクもすぐれなかった。細い目に高い頬骨、厚い唇にややしわがれた声、それに体のスタイルも整っていない。

にもかかわらず彼は映画俳優として独自の権威を確立し、男性映画俳優の中で3大名優の一人と謳われるようにまでなったのである。

映画俳優は決してマスクの良し悪しによってのみ成功いかんが決まるのではない。朴基柱の俳優活動がそのよい実例である。

マスクのすぐれなかったせいで、彼は長年脇役俳優の身に甘んじた。けれども彼はどんな場合も、振り当てられた役をユニークにこなすことで、観客の注目をひいた。

劇映画『崔家の人々』のシーン

彼が大学卒業後の初期に出演した映画に、『崔家の人々』があった。1960年代の人気映画の一つであったこの映画で彼は、主人公の婿允植（ユンシク）の役を演じた。あの厳しい戦争のさなかでも、ログの法則が変わるものかとして、「冷静な理性の判断」をうんぬんする数学者允植、カモメ型に両分けした頭髪に分厚いロイド眼鏡を掛け、まぶしげな表情で美貌の妻を見つめる朴基柱の姿は、自由を束縛されていた環境の中に生きた植民地インテリの姿を

生き生きと表出していた。

この映画の演出家呉炳初（オビョンチョ）は、当時、こう語っている。

「この映画の配役の中でわたしが特に気を配ったのは、人民軍の分隊長英秀（ヨンス）役を演じた崔昌洙（チェチャンス）と数学者允植役を演じた朴基柱だった。というのは、彼らの演技いかんにより映画の重みが増しもすれば、そうはいかないとも言えるからであった。彼らはともに新人俳優だったので、それが気がかりだったのである。

朴基柱の役は、大きく論争をしたり、悔悟や煩悶にもだえたり、別段苦悩にさいなまれたりするようなこともない人物を演ずることである。このような役を務める俳優は、ともすればその役をまっとうに果たせず、ぎこちない演技に終始するものである」

新人俳優朴基柱は、担当した人物の性格上の特性を深く研究し、不自然なところのない真実味のある演技を見せた。そういうわけで人々は、数学者允植のことを忘れないでいるのである。

祖国が何であるかも知らず、政治の外で生きる弱々しい人間、どこか同情を覚えはするが、練れていない素朴な人間、優柔不断で素直な、内向的でありながらも理性的な允植役を見事に演じた朴基柱は、人々の大きな注目をひき、その名よりも「ログ」「数学者」という代名詞

で知られるようになった。

彼は数十編の映画で、技師、研究士、労働者、事務員などさまざまの脇役を演じたが、その中でわが技量をたゆみなく磨いていった。彼はおのれの演ずる脇役をわが骨肉のごとく、愛人さながらにみなし、そこに情念をつぎこんだ。

朴基柱が脇役をいかに重視したかは、ほとんど文章というものを書いていない彼が執筆した『脇役俳優についての所感』という手記にもよく表れている。

ここにその一部を紹介しよう。

「愛する祖国に帰国し、俳優生活を始めてからいつしか20余年がすぎた。

この短くない俳優生活を振り返ってみると、わたしの演技のほとんどは脇役だったと言える。だが、わたしは生涯脇役を務めても後悔しないであろう。

脇役は脇役としての自負、誇りがある。

中には、映画の幾つかのシーンにのみ出演するような俳優にいかなるやり甲斐があるのかという人もいようが、それは脇役が果たす演技の持ち味を知らない人たちの意見にすぎない。

映画は絵画のように静止したものではなく、実生活でのように生きて動く画面を通して、人間とその生活を見せるものであるから、主導的なものと同時に副次的なもの

のも具体的にそこに反映されるのである。

まして、多様な人物の関係をもってドラマが始まり進行する映画の場合は、主役のみならず脇役もそれぞれ特有の個性を具有して画面に現れなければならない。

映画の形象的な調和は、登場人物、なかんずく主役と脇役の調和がいかになされるかにより決定されると、わたしは考えている。

この調和が正しくなされていない映画を見る人たちは、人物の関係で混同をきたすことになる。そんな場合、人々は一時的にしろ主人公を忘れ、脇役に魅力をひかれさえする。

脇役も主役に劣らず苦心に苦心しなければならない。こうした面で脇役の演技は主役の演技よりも難しいと言えよう。

そうした意味で、わたしが脇役を演じている中で得た教訓は、大きく二つの面に分けて見ることができる。

その一つは、取るに足りない微々たる脇役だとして、深く研究もせずなんらの感情も抱かずに出演することである。このような演技をたとえて言えば、杭木の演技である。

主人公の演技がいかにすぐれていても、脇役が杭木のような木偶の坊なら、映画は観客の感興を大きく呼び起こすことができなくなる。

わたしがこれまでさまざまの映画に脇役として登場して感じたことは、映画の全般的な流れとともに脇役も自らの感

情の積み上げを進めなければならないということである。

というのは、脇役の場合は主役とは異なり、映画の幾つかのシーンにのみ登場し、したがって演技が切れ切れになるからである。1編の映画で数シーン、時には1、2のシーンにのみ登場する場合もあるのが脇役である。

映画に現れないシーン、観客には見られていないシーンの場合にも、脇役は主人公たちと同様に生活しているのである。ただ、それは画面に現れていないだけのことである。

脇役の演技で杭木の演技をなくすためには、その俳優が画面には現れない裏面の生活を自らの力で探求しなければならぬということを強調したい。

そうすることで、脇役も感情を高度に保ち、出演するシーンで主人公、主演者たちと息を合わせて演技を一つに統一させ、映画をスムーズに作り上げていくことができるのである。

わたしが脇役の演技で得た今一つの教訓は、演技を誇張して行えば、かえってマイナスになるということである。

脇役に必要以上の性格を付与すれば、観客の視線がそこへ集中して、ストーリーの流れと感情の表出効果を損なう結果を招くことになる。

最近わたしは、劇映画『朝鮮よ　走れ』に出演した。

この映画は一伐採工青年がランニングに励み、ある国

劇映画『朝鮮よ　走れ』のシーン

際マラソンに出場して優勝し、祖国の栄誉を輝かせたことをテーマにしたものである。

この映画にわたしは山里の分校長文奎（ムンギュ）役で出演し、主役永豪（ヨンホ）のランニングを毎日のように指導する脇役を演じた。

わたしはここで永豪の練習を指導するシーンと、都市の競技場における予選で決勝点を前にして倒れた時に力づけ、勇気をふるい起こさせようとするシーンで、セリフと動作を誇張して演技を行った。撮影後この映画のラッシュ

プリントを見たわたしは、どうにも異様な思いをした。

考えてみると、わたしの演技が度を越し、主人公の演技に陰りを作っていたのである。

原因は、作品の思想主題的な課題の達成のみを念頭に置いて、自分が担当した人物の個性を生かすことに汲々とし、主人公の演技を生かすことについては深く考えていなかったことにあった。

言い換えれば、わたしの主観的な意図と情熱が、あまり面白くない場面を招来したのである。

脇役も映画の登場人物なのだから、それなりの性格を備えるべきことは言うまでもないが、それはあくまでも主人公を際立たせることに役立てなければならないということを忘れてはならない。

脇役の演技だとして軽んずべきではなく、逆に個性を生かすとして映画の全般的な流れに逆らって、過度にわが性格を押し出そうとするのは、脇役が常に警戒しなければならないことである。……」

この手記には、脇役に対する朴基柱の偽らざる見解、脇役の演技はどうあるべきかという一見識、芸術に向けた誠実性が良く言い表されている。

彼は脇役を主としていた俳優時代にも、話術の腕を磨くべく努力に努力した。

ここにその生々しい実例がある。

いつだったか、朴基柱は朝鮮劇映画撮影所から西城（ソソン）区域のわが家まで4キロ以上もの道を毎日何かを一人でつぶやきながら歩いて帰宅していた。これを見た二人の青年が不審に思い、もしや気が変になったのではないかと心配してその後をつけた。

しばらくして、朴基柱は道ばたに立ち止まり、わが胸を激しく叩き出した。

「やはり？」

後をつけていた二人はあわてて彼に追いついた。と、胸を叩いていた朴基柱が、空をあおぎ、大声で「ははは」と何度も笑った。それに笑い声がその度に違って響いている。明らかに狂った人間である。

二人は、途中もしものことがあってはと気になり、黙ってなおも後をつけた。やがて朴基柱はある家の前で止まり、戸を開けて中へ入った。

後をつけてきた二人は、自分たちも中へ入ってみるべきかどうかととまどった。その時家の中から話し声がもれてきた。

「あんた、どうして毎晩歩いて帰っていらっしゃるのよ。通勤バスに乗って早く帰るのが嫌なの？」

夫人らしい女のなじる声。

「おれのこの声がまっとうに発音されない限り、バスに乗って帰るようなことはせんよ」

「そんなにまでしなくてもほかの人たちは映画にいつも出ているじゃありませんか」

「そう簡単にいくものではないよ。とにもかくにもおれの話術は正しく直さなきゃならんのだ。自分の声がスクリーンに出ないんなら、俳優の価値を失ってしまうんだよ」

「俳優の価値！」

二人の青年は感嘆した。彼らは朴基柱が話術の練習をすべく一人で夜道を歩いて帰っているということを知った。

「俳優は思うほどに容易な職業ではない」

「ぼくは、カメラの前に立って撮影さえしていたら、それで済むものと思い込んでいた」

二人は新たな感慨にふけり、軽い足取りで引き返した。

当時朴基柱は新人俳優にすぎなかったので、人々はその人となりをよく理解しておらず、変人扱いにしていたのである。

劇映画に出演しても、他人がセリフを吹き込むような俳優は、びっこの俳優だとか、唖の俳優などと呼ばれている。

朴基柱が映画界入りしてすぐ、ある映画のさして重要でない脇役として出演したことがあったが、その発音が思わしくないので、彼のセリフは吹き替えによってなされた。

彼は大学当時、発音の練習に精力を傾けて驚くほどに上達したが、映画俳優という職業からそんな程度ではまだまだ未熟のそしりは免れなかった。それは音調の面で

集中的に現れた。自分では正確だと思っても、聞く人はかぶりを振った。

演出家はこの点を考慮して、吹き替えを指示したのである。朴基柱にとって、このことはわが運命にかかわる由々しい事態であった。異色的な地声、生活的に不自然な型にはまった話し方、慣れないマイクがスムーズな発音を妨げるなどして、彼を唖の断崖へといざなったのである。

あれこれと思い悩んだ末に到達した解決策は、実践であった。

それ以来彼は、日中に果たせなかった目標を出退勤の道で達成しようと決心した。その道は異色的な地声を正し、型にはまった話し方も是正し、生活感のある話術に習熟するために歩む道であった。

このように何日も出退勤の途上で話術の練習に励んだ甲斐があって、脇役の彼はユニークな演技をもって映画の制作スタッフはもとより、観客をも満足させた。

彼は自分の役中人物がその時々の状況、そのシーンでのみなしうるセリフの仕方を見つけ出すまでは、担当人物の内面世界に入り込んで行動することも差し控えた。映画の登場人物の行動が何を目指し、内面世界がいかなるものであるかは、ほかならぬそのセリフを通して推し量りうるからである。

敵役を演じて

朴基柱の名が広く知られるようになったのは、彼が敵役を演じ始めてからである。

敵役には、同じ集団の中で否定的な行動を取る役と、劇中敵対的な人物として行動する役とに大別されるが、朴基柱は主として敵対的な人物に扮して出演し、頭角を表した。

敵役を演ずる際、彼は表情づくりに少なからぬ力を入れた。中でも目による表情づくりに精根を傾けた。

人間の顔のうちで、目はその人の内面世界を集中的に、はっきりと見せると言える。目は、時には口では表現できないほどの細かい感情や微妙な心理の動きをも表出する。

観客に深い印象を与えた朴基柱の表現演技の深い味は、幾編もの映画で敵役になって登場し、そこで見せた演技を通して味わうことができるであろう。

彼は劇映画『安重根（アンジュングン）、伊藤博文を撃つ』で、日本人税吏に扮して出演した。

彼は、日本政府が朝鮮の併合を目指して朝鮮に与えた借款の返済を迫った際、その金品の徴収に駆け回り、田舎の老婆から木綿の反物を強奪し、目を怒らせて怒鳴りつける暴虐な日本人税吏の行為と有機的に結びついた、

表情の演技を非常に印象深く演じた。

この時彼は、家の中に土足で踏み込んで反物を奪い取り、すがりつく老婆を目をむいて足蹴にするなどの演技を生々しく演じることで、当時、日本の侵略的、略奪的な本性を暴露し、作品の主題思想を深く描き出す上に大きく寄与した。

彼はこの映画に出演した同じ年に、劇映画『無名の英雄』にも出演したが、彼が演じた日本人売文記者「中村」の演技は極めて印象的であった。

20部作のこの多部作劇映画は、主人公たちの演技と並んで敵役を演じた朴基柱の人気をも高めた作品であった。

ここで朴基柱は中村役を、象徴的な表情演技をもってリアルに演じた。

劇映画『無名の英雄』のシーン

彼は、喜色を満面に浮かべ、他人を見下ろすような目付きと曲馬団の道化役者を思わせるような歩きぶりや、手ぶり身ぶりをもって中村役を生き生きと演じた。

彼がその表情、セリフ、ジェスチュアの一つひとつをいかに巧みに演じたかは、一般の観客はもとより、映画の評論家までもがいたく感嘆し、舌を巻いたことからも良く分かる。

この映画に出演して以来、彼には「中村」という今一つの呼び名がつけられさえした。

朴基柱はその他の多くの映画にも敵役として出演して、すぐれた演技を見せた。

彼のそうした演技の一つが表情演技、より具体的には目の演技であった。

彼は同僚たちから、その小さい目、細い目をもってしては目の演技を志しても大して期待は持てないから、口の動きや顔面筋肉の動き、それにジェスチュアなどの行動演技に力を入れるべきだと勧められたが、おのれの肉体的条件に適した演技を研究し、見事に成功したのである。

彼の演ずる敵役がとてもすぐれていたので、演出家たちも映画の制作にあたり、敵役が必要な時はこぞって「中村」を呼んだものである。

喜劇俳優として

朴基柱が映画にそれぞれ敵役、喜劇役者、肯定的人物として出演した回数の割合を見ると、おおよそ40パーセント、30パーセント、30パーセントである。

彼は、俳優生活を始めた初期には主に敵役を、次には喜劇的な人物を、末期には心理正劇的な作品で主に肯定的な人物を演じている。

朴基柱の喜劇へのスタートは、1960年代末に作られた風刺劇に出演することで切られた。

当時、朝鮮劇映画撮影所は、俳優たちの技量を高めるべく、舞台稽古をいろいろとし、その中には『補充兵』などの風刺劇も数編あった。

南朝鮮で遊撃隊の討伐に出て麾下の全将兵を失い、命からがら一人で逃げ帰った中隊長のぶざまな行動を通して、南朝鮮の軍隊は米軍に操られるかいらい軍にすぎないということを語る風刺劇『補充兵』で、朴基柱は補充兵役を演じ、南朝鮮の補充兵なる者の性格がいかようなものであるかを、個性的な演技をもってまざまざと描き出した。

彼が演じた補充兵のざまは、何日も餌にありつけなかった野獣のようでもあれば、山田に立つくたびれたかかしのようでもあった。と思うと、何かのことに困り切って途方に暮れると、とろんとした目をぱちぱちさせ、唇を噛んで体をわなわな震わせる動きは、電気に感電した

精神病者そのものである。

その頃、朴基柱との結婚を間近にした婚約者がこの劇を見て驚き、朴基柱の性格に疑問を抱いて、結婚に尻込みした。

そこで朴基柱の友人が彼女に会い、俳優はその職業上さまざまの性格の人物に扮して演技をすることになるが、それは決して俳優その人の本性ではないと説得した。すると彼女は、自分も俳優の職業について知らぬわけではない、けれども、あれほど見苦しくて間が抜け、狂気じみた演技ができるのは、俳優の天性にそのようなものが備わっているからこそではないか、でなかったら、どうしてあんなにもすごく真に迫った真似ができるのかと反駁した。

友人は空しく引き返したが、撮影所の俳優たちの間では朴基柱の演技をたたえる声が続き、それが彼女の耳にも入るに及んで、二人の仲はめでたく元に戻ったのであった。

朴基柱はその後も幾編もの風刺劇に出演して、次第に風刺劇の有様と演技の妙理を体得していった。

そうした中で彼の喜劇的な才能が演出家たちの注目を引き、風刺的な作品には彼がなくてはならぬ俳優だと認められるまでになった。

彼が喜劇的様相を深く会得し得たのは、喜劇的な生活についての知識と芸術的な技量を十分に身につけていた上、喜劇的行為のディテールの発見能力と表現能力にも長けていることに起因していた。

その一例は、彼が主役を演じた短編劇映画『当然の災難』のクライマックスのシーンである。

このシーンで彼が演じた生活の断片は、わが家で昼寝をしていた時、水道のコックを締めなかったせいで水があふれて室内にまで流れ込み、電気に感電して仰天し、あわてふためく演技である。

このクライマックスで朴基柱は、次々に変化する人物の感情の動きを的確に捉えて見事に表現した。

最初深く眠り込んでいた無意識状態の表情は、不意にうわっと驚き、あわてて飛び起き、青ざめた顔色へと変わり、ついでそれは何をどうしてよいか分からずうろうろする動きと、困り果てて泣き出しそうになる表情へと変化し、その次には今にも卒倒しそうになり、やけくそになった表情に、最後には絶望直前の感情へと続く行動演技に移るなど、このクライマックスは朴基柱の技量がいかに高い境地に達していたかをはっきりと見せる生き生きとしたシーンであった。

当時この映画は、多くの短編映画の中で演技のレベルが最高に達した作品の一つであると評価された。

短編劇映画『当然の災難』のシーン

3．時代の名作と主演俳優

成功の秘訣は演技の色に

1988年に劇映画『わたしが見た国』が制作された。

この映画は、読売新聞の論説委員で、日本の著名な文筆家であった高木健夫氏を原型にした作品で、主人公高橋が朝鮮を訪れ、探訪記者の耳目で見聞し、印象を強めていく中で、朝鮮に対する理解を抱くに至るということを内容とした作品である。

歳40にして元服という言葉の通り、49歳を迎えて初めて、脇役の域を抜け出て、本格的な映画の主役を演ずることになった朴基柱の喜びは、たとえようもなく大きかった。それは映画界から受けた信頼であり、夢のような幸運であった。

その時彼は、勲功俳優の称号を受けたばかりで初めて主役を演ずることになったので、大きな感激にひたり、興奮した。

朴基柱は、この作品を自分の野心作たらしめようと決心し、主人公高橋の性格の特徴を正確に分析、把握し、

その嗜好と趣味、ひいては日本人の生活と、そこに見られるささいな動作に至るまで綿密に研究し、演技に取り入れるべく努めた。さらに彼は、かつて劇映画『無名の英雄』で演じた日本人記者中村の動作がこの映画で反復されることがないよう、二人の共通点と違いについても具体的に吟味した。

ところが彼はそれまで、演技における原則的な要求の一つである演技の色については、別して深く考えていなかった。

映画で主人公が空港を発つ際の表情を、彼は重々しくして演じたのであるが、これは性格の論理に合うものではなかった。ここで主人公の顔色は、明るくてしかるべきであった。

映画の主人公が訪朝日程を終えて帰国することになる空港におけるシーンで、俳優がいかなる意図をもって演技を演じたにしろ、その表情を重々しくするのは、この映画の性格に反し、妥当性にも欠けていると言わざるを得ない。

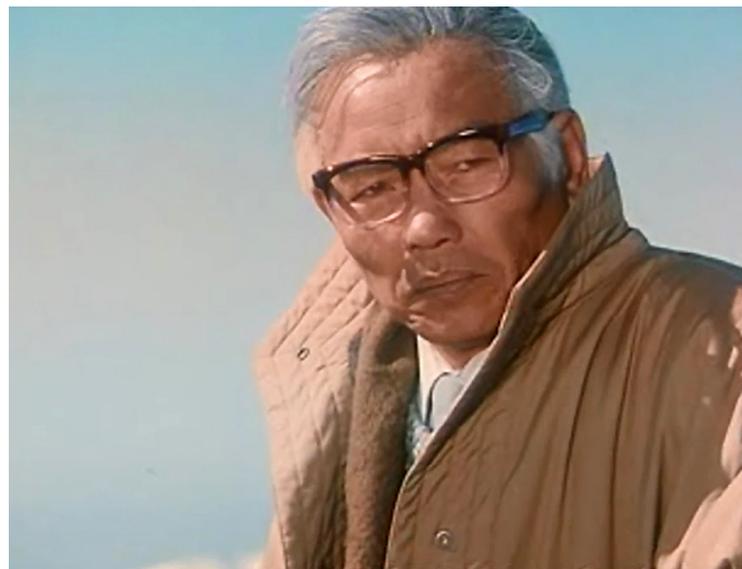
主人公高橋は、探訪記者生活を戦前から変わりなく行い、そんな中でも知性人の良心を失うまいと努力し続けた人物である。そんな彼が朝鮮を訪れて、いろいろな人に会って意見を交わしているうちに、長年自分が抱いていた見解とはまるで異なる朝鮮を知り、疑惑と喜び、驚きと激情

にかられて、一体いかなる力が世界最良の社会制度を作り出したのだろうかと考えに考えた。こうして高橋は、チュチェ思想がいかに正しい真理であるかを実感し、チュチェ思想の核は、朝鮮人民が慈父と仰いでやまない金日成主席の熱いヒューマニティーであると悟った。

この映画における主人公の性格と生活には、悲劇におけるような、主人公の志向や理想が挫折したり、戦いに破れて悲嘆し、観客の同情を買うことになるようなそんな点は何もない。こうして見ると、主人公高橋の思想・情緒的な体験とか、性格の動きの論理に照らしてみて、空港におけるシーンで見せる彼の表情は明るくても希望に満ちていなければならないはずだった。

ではどうして、主役を演じた朴基柱が、このシーンで主人公の表情を重々しくすべきだと考え、実際その通りに演じたのであろうか。

彼は、主人公には以前、日本の植民地支配が続いていた頃、自分が書いた記事の虚構性を暴露した柳千成（リュチョンソン）に民族的な侮辱を加えたことを思い出し、また、この大きな幸せと燦然たる未来が約束されている国と別れることになる口惜しさもあったはずだと考え、平壌国際空港における主人公の表情を謹厳な、重々しいものにしたのであった。

これは彼が主人公の演技をある偏った側面に帰着させ

劇映画『わたしが見た国』のシーン

て自分の意図のみを先立たせることで、作品全般をわが演技に溶解させたのである。言い換えれば、作品の全体にわが意図を従わせて演技を行うべきだということを忘れ、おのれの意図に作品の全体を従わせることで映画の結末を本来の企図とは反対に色変わりさせてしまったのである。

彼は、おのれの演技で露呈した過ちを認めて、映画の最後のシーンを作品の本来の企図に沿って撮り直した。その結果、映画の流れは一貫して生き生きとしたリアル

なものとなり、『わたしが見た国』は思想・芸術的にすぐれた作品として評価された。

1991年5月23日、金正日国防委員長は、先日わが国を訪れた高木健夫氏の子女である兄妹が朝鮮劇映画『わたしが見た国』を見て、実にすばらしかった、映画の主人公は不思議なほど自分たちの父親にそっくりだったと語ったと言った。

映画の主役を演じた朴基柱は、この映画に出演して新しい目を開くことができたとして、その手記にこう書いている。

「作品の形態上の特性に応じた演技における笑いと涙、ロマンは、なんらかの外形的な動作をもって表すべきではなく、作品に設定された性格と生活そのものからおのずと表れ出るものにならなければならない。

そのためには、演技の中で、役中人物がそれぞれの状況、それぞれの契機に、それ以外にはほかに表現のしようがない、生活的に妥当な、思想・感情の世界の情緒的な色合いを鮮明に描き出すようにしなければならない。

俳優であれば誰であれ、演技の色をおろそかにすべきではない。

演技の色を重視することにこそ、万能の俳優、名優になる秘訣の一つがある」

俳優と定見

玉にも疵と言われているが、人民に愛されている朴基柱に生涯忘れることのできない痛恨事、いつまで経っても消えやらぬしこりがあった。それは一生おのれをののしり、痛罵してやまない心の疵だったと言えた。

劇映画『たくましい木』の制作中のこと。映画の主人公得済（トクチェ）役を演じた朴基柱の演技は称賛すべきものだった。彼は主人公の性格を正確に把握し、それをはっきりと生かしうる方法も見出して、生き生きとした演技を演じた。セリフの発声も立派だった。

ところが、映画で得済が若者たちと娯楽の集いを楽しんだ時、彼も立ち上がって歌を歌ったが、その後の試写会でトーキーから流れる得済の歌声は他人の声であった。俳優たちの中から、あれは朴基柱のものではないという声がささやかれた。それに間違いはなかった。確かにこのシーンでの歌は朴基柱の声ではなかった。

演出家が、この歌には躍動する時代の息吹がこもり、そのメロディーは情緒的でありながらも気迫がある、ところが朴基柱の声はかすれているのでこの歌を歌うのは適切でないとして、専門の歌手に歌わせたのである。つ

まり歌を歌う動作は朴基柱がし、歌声は他人のものになってしまったのである。

そのことで朴基柱は大きく後悔した。このいささかしわがれた声でもってしても歌を十分に歌える、それにある意味では、そうすればいっそう真実なものになれたはずだろうに、なんのためにその時尻込みし、自分の主張を通さなかったのか、と。

朴基柱の俳優生活の中で得た実践的な教訓は、俳優は演技のみならず、演出家との共同作業においても独自性を守るべきである、俳優が定見を持たず、演出家にのみ依拠して、ただその指図に従い、受動的に動くだけでは、演技は決して生きたものになれない、ということであった。

演技はリアルに

1980年代の名作とされている劇映画『保証』において朴基柱は、映画俳優の才能をいかんなく示した。この映画に重要な脇役として出演した朴基柱は、正劇的映画の俳優へと確実な第一歩を踏み出し、貫禄ある名優と認められたのである。

朴基柱は劇映画『保証』に出演して、許真成（ホジンソン）役を実にリアルに演じ、人々を驚嘆させた。

劇映画『保証』は、朝鮮人たちがどうして朝鮮労働党を母なる党と呼んでいるかを、哲学的に解明した作品であった。

その誰にも打ち明けることができず、胸に秘め続けた旧悪を、20年後の今、党組織にありのままに告白することで、願ってやまなかった朝鮮労働党への入党を放棄する許真成。人々は映画俳優の朴基柱ならぬ、苦渋と歓喜の両極端に立って涙に頬を濡らす真の許真成を見、朴基柱の演技に魅せられてなんという名優だろうかと感嘆した。

朴基柱は、1960年代の中頃から1980年代末まで、短編の映画数十編を含む100数編の映画に出演し、そのいずれの演技も立派にこなしているが、なかんずく劇映画『保証』における演技は、万能俳優としての才能をいかんなく誇示して余りがあるものだった。

最初映画の台本を読んだ朴基柱は驚いた。自分が演ずることになる許真成は、かつて国法を犯した罪を隠し、20余年もの間わが良心にそむいて生きてきた人物である。彼がこのような性格の人物に出遭うのは初めてのことであった。

映画には、作中人物許真成が主人公の党責任書記から党規約を手渡されて、感動の余りに泣くシーンがある。このシーンは朴基柱の演技で最高に重要な、しかも難しいものであった。20余年もの間わが罪過を隠し続けたことで、自分が入党できそうとは夢想だにしなかった。その自分に入党を準備するようにと勧められたのである。この思いもよらない党責任書記の言葉にうろたえ、感激の余り肩を震わせて泣くシーン。その積もりに積もった内なる感情を、観客に明確に見せなければならないのである。

映画を見る人たちは、いかなる場合も登場人物と自分を結びつけるものである。作中人物が悩むと、自分も同じようにもどかしがるのが人情である。

人間の生命は長いものではない、20数年隠してきたのに、この先わずかに残っている生を耐え抜けないはずがあろうか、これが許真成の切ない思いであった。このような彼が、思いもよらず朝鮮労働党の党員という名と並んで自分が生きることになれたと思ったとき、その心情をいかに表現しうるだろうか。その演技に観客はどう反応するだろうか。

台本には、党規約を手にして感激にむせぶ許真成とだけ書かれている。

党規約を手にして、「感涙にむせぶ許真成」ということの一文を凝視した朴基柱は考えに考え、苦心に苦心した。

このシーンにおける演技は、予定されたシーンをいかに充たし、どのように泣けばよいかということが基本とならなければならないのである。

罪悪意識の消えぬまま党規約を手にして党責任書記に背中を向けた彼は、数歩歩き、目の前にドアがあるのを見て立ち止まり、再び歩みを移してドアのかたわらの椅

劇映画『保証』のシーン

子によろよろと座り、嗚咽する。

許真成の嗚咽で重要なのは、震える肩や両頬を伝って流れる涙ではなく、20数年もの間笑うことも泣くことも忘れていた人間の胸中に湧き上がる激情と歓喜を表出することであった。

当時この映画を評した記事には、「朴基柱は苦悩しながらも誠実に働く許真成の内面世界をいろいろな角度から立派に見せた。特に、許真成が党規約を手にしたとき、こみ上げる激情を抑えるべく、手で口をふさぐ演技は嘘いつわりのない真実であった」というものがあったが、これは彼の演技がいかに真に迫っていたかを語るものである。

実に彼は、これは俳優の嗚咽ではなく人間許真成の嗚咽でなければならないとして、演技を見事に成功させたのであった。

朴基柱は、許真成役を演じたこの映画を通して、俳優は決して観客をだますことができないし、観客はだまされるものではないということを切実に自覚した。

この映画の演技を通して彼は、万能の俳優を志すには俳優自身が生活の体験と技量を目的志向的にたゆみなく積み上げていかなければならないということを改めて確認した。

朴基柱は、劇映画『保証』の許真成役を立派に演じたことで、1987年4月勲功俳優の称号を授かった。

4．多方面にわたる技量の所有

技術・技能を活用して

歳月は止むことなく流れ、朴基柱の歳も50代の半ばに至った。そんな歳で修業というのは論外だとみなす同輩もいたが、朴基柱は一つでも多く学ぶべく努力を続けた。

彼は時間の許す限り、その時々に応じて読書もすれば、サイクリング、車の運転、釣りなどをして映画俳優にとって必要な動作を研究したし、スポーツの愛好者として柔道やテコンドー、その他の幾つかの種目でアマチュアの域を脱するほどになっていた。

彼はサッカーやボクシングなどいろいろな試合をしばしば観覧し、わが子たちの学校の運動会にも欠かさず出掛けていた。彼の大工の腕はプロに劣らず、わが家に必要なベッドやソファー、それに子どもたちのためにラケット、そり、こま、たこなども作って与えていた。

帰国後の1年6カ月、端川マグネシア工場で旋盤工として働いた経験があったためか、旋盤、ボール盤、シェーパーなどの工作機械についても詳しく、車の運転術も

堂に入っていた。また、字や絵も上手で、撮影所俳優団の速報掲示板の文字や絵も一手に引き受けて書きもすれば、トランプや将棋の腕もずば抜け、登山家でもあり、ヘビースモーカーでもあった。

朴基柱がこれほど多方面にわたる技能を備え、多様な趣味を持つに至ったのは、映画俳優の演技に必要な技芸に熟達せんものとの意図に根ざしていた。

朴基柱の多様を極めた演技が集中的に発揮された作品は、多部作劇映画『民族と運命』だと言えよう。

多部作劇映画『民族と運命』は、金正日国防委員長の発意とその指導の下に、歌謡『ピョンヤンが一番だ』を主題にして、民族と運命に関する問題、言い換えれば民族の運命はすなわち個人の運命であるという種子を内容とする作品である。

彼はこの映画で、柔道とテコンドーの技を活用して生き生きとした演技を見せた。

テコンドーの道場で行った模範動作、それに全斗煥(チョンドゥファン)(南朝鮮軍の連隊長、のちの南朝鮮大統領)をざまなくぶちのめして制裁を加える痛快な演技などは、まさしく俳優朴基柱の身についている動作であった。

さらには、第8部で乗用車を運転し、妻タルレと一緒に金亨郁(キムヒョンウク)の宅を訪ねていくシーンの演技も極めて印象的

であった。このシーンでは朴基柱がその慣れた運転術で車を走らせながらデリケートな演技を行うことなどで、それぞれの状況に即して役中人物の内面世界を生き生きと見せて、作品の真実性をいや増すことに成功した。

彼の車の運転術と関連して、ある険しい山道を、重量トラックを自ら運転して見事に乗り切り、その撮影後、涙を流して過去を思い返し、感激にふけったという逸話がある。

彼が劇映画『たくましい木』の主役を演じた時のこと。映画の制作スタッフはある疑問を抱いた。映画の中に、朝鮮で最初の重量トラックが作られて、10万キロ無事故試運転を行う主人公を演ずることになった朴基柱が、車の運転練習を一向にしようとしないのである。

制作スタッフは、車が遠い道を行く場合の運転は本物の運転手を用い、クローズアップする時だけ自分がハンドルを握るつもりだろうと考えていた。

ところがいよいよ本番に入った時、彼らのおもんぱかりはくつがえされてしまった。

高度の運転術が求められる高い山と深い谷間の道を、新型の重量トラックを走らせるシーンを撮影することになった時、思いもよらず朴基柱が平然と運転席に座り、ハンドルを握ったのである。

車を見事に運転して撮影が終わると、制作スタッフは

感嘆して運転席の前へ駆け寄った。ところが、驚いたことに朴基柱はハンドルを手にしたまま涙を流していたのである。それも感極まって……。

険しい渓谷を見事に突破し得たことで喜びにひたる感涙だろうと思い、彼らはあえて声をかけようとせず、ただ彼のそんな姿を見つめていた。やがてその一人が聞いた。

「朴基柱さん、みんなに黙っていつ運転を習ったのです」

「ぼくは日本にいる時、やってみなかったことがなかった」

こう切り出した朴基柱は、あの苦しみに満ちた生活の中で、一縷の夢を抱いてある撮影所を訪ねたところ、朝鮮人だというただそれだけの理由でむげに採用を断られたことや、ようやくトラックの運転を習い、とにもかくにも生き続けたものだとして、こう言った。

「祖国を離れて暮らしたことのない人たちには、祖国がどんなに有り難いかということをはっきりとは知らないと思う。有り難い祖国がぼくを大学に入れて勉強をさせてくれ、今ではこのように全国の人たちに知られる映画俳優にまで育ててくれたのだ」

涙に濡れたその言葉は、彼らみんなに真実に祖国に尽くそうと訴える清い良心の呼び掛けであり、無言の実践を意味していた。

マスクではなく頭で

人間の外形は各人各様である。背丈も顔形も、体つきも歩きぶりも、それに目の形やその精気もみな俳優に適しているか否かの重要な表徴となる。

そうした意味で、朴基柱の見掛けには俳優の素質があるとされる点が一つもないと言えた。どこにも見られる並みの体つきと口数の少ない男で、一日中一緒にいても自ら先に口を開くことはごく稀で、その感情もほとんど外に表さない朴基柱は、見掛けだけでは映画俳優、アーチストとはとても思えない人物である。ぼくとつな雪隠大工のようでもあれば、年中野外で働く土木労働者のようでもある。

とは言え、役中人物の性格や行動を研究する時のその異様な眼光、固く結んだ唇、顔に表れる細やかながらも豊かな感情の変化を見つめていると、彼が思索家、情熱家であることに気づくのである。

彼が立てた演技の構想案を見ると、驚くほどこまごまと書き記されている。そこには作品の種子と主題思想的な課題は言うまでもなく、役中人物の性格、趣味、好みと習慣、行動、それに演技の細部、他の登場人物や自然の対象との心の触れ合い、セリフの仕方など、演技の方向と方途が設計図のように具体的かつ緻密に記されている。

朴基柱とともに長年俳優生活を続けた人たちが最も深

い印象をもって感じたことは、彼がいったん役を振り当てられると、極めて誠実で真剣な、情熱にあふれた思索家、探究者になるということである。

朴基柱はいかなる場合であれ、頭をもって演技を行うことを鉄則としていた。

彼が演技をマスクによってではなく頭によって行うべく、いかに思索し、探究したかを語る一つのエピソードがある。

多部作劇映画『民族と運命』車弘基（チャホンギ）編には、主人公車弘基が憤激した余り手の甲にたばこを押し付けて火をもみ消すというシーンがある。

朴基柱はこの演技をリアルに行うべく研究に研究し、実際に火のついたたばこを手の甲に押し付けて火をもみ消す練習まで行った。その跡が膿んではまた膿み、遂にかさぶたができて固くなるまで……。

役中人物に対する彼の思索と探究は、生活に対する深くも広い知識と豊かな体験がその前提であった。

彼は、シナリオライターや演出家以上に生活の知恵に長け、深く体験もしている。彼はそのように多様な生活を体験しつつ姉妹芸術の研究をも深めた。

彼は暇があると小説その他の書物、新聞などを読んでいた。人一倍感受性の強い彼は、音楽と美術を格別に好んだ。晩年までも彼は携帯用テープレコーダーを利用して音楽を鑑賞し、思索にふけった。

彼が俳優に似合わぬマスクの持ち主でありながらも成

功を遂げたのは、深い思索とたゆまぬ研究をもって、個性的でユニークな演技を行うことに心がけたからである。

他方、朴基柱はおのれの演技のみならず、新人俳優の成長にも助力を惜しまなかった。

ここに、そうした生き生きとした実例がある。

俳優が役中人物の演技をリアルに演ずるには、作品を深く把握する必要があると考えた。朴基柱は、撮影の開始に先立って各シーンの演技の構想表を作成した上で、わが役の演技を研究することを常とした。

劇映画『朝鮮よ　走れ』で山里の分校長文奎役を演じていた時のこと。

ロケーション先で、ある新人俳優がカメラの前で演技がどうにもうまく行かず、半日もの間あれこれと演技を繰り返したが成功せず、撮影が中断されてしまった。この事態を目の前にして、朴基柱はじっとしていられなかった。制作スタッフは困惑しきっている。

悄然とし、みんなから遠く離れて座っている新人俳優を見かねた朴基柱は、その前へ歩み寄った。

「君、得点名手はどんなプレーヤーなのか知っているかい」

ひどい叱責を受けると思っていた新人俳優は、その思いもよらない言葉に驚き、彼の顔を見上げた。

「テレビや競技場で、サッカーの試合を見たことがあるだろうな」

「そりゃもちろんです」

新人俳優はサッカーの話を持ち出されて、やや緊張がほぐれた。

「だから有名な得点名手が試合で見事にゴールを決める痛快な場面も見ているわけだ」

「そうですとも。サッカーの試合は、ゴールを決める場面が痛快なので見るものでしょう」

新人俳優は、サッカーのことなら朴基柱にひけを取るつもりがなかった。

「ふむ。それじゃ、得点名手はゴールをどのように決めていると思うかね」

「そりゃ言うまでもありません。攻撃手は相手のゴールの近くで敵のタックルなど執拗な防御を巧みにかわして、ボールを正確にシュートしています。だからこそ得点名手なのでしょう」

「それなら、残りの10人はいなくても、得点名手一人さえいたら、問題なく試合に勝てるだろうな」

「えっ、じゃあゴールキーパーは必要がなく、防御は誰がし、また得点名手にボールを誰がパスしてやるのです？」

朴基柱はここだとばかりに言った。

「そう、そこだよ。君がさっきまでカメラの前であれこれと演じているのを見ると、自分が果たすべきその多くの演技目標の全体像をここでいっぺんに呑み込んで演じようとしているようだが、それでは喉が詰まるほかないのだ」

「え？　それはどういう意味なんです」

「ほほ。言うなれば一つのシーンで、ゴールキーパー

にもなればフルバックにもなり、同時に得点名手にもなって見せようとあくせくするのだから、演技がついていけないのだよ」

新人俳優はその時になって、朴基柱がなぜ得点名手の話を持ち出したかを理解した。

「ぼくが本当にそんなふうにしていたんでしょうか」

「そうだとも。一つのシーンで役中人物の諸側面をいっぺんに見せようとあくせくしていたわけだから、その人物の当面した内面世界がいかなるものであるかをはっきり確認できず、ただ俳優つまり君の独りよがりのいわゆる理性的な分析のみが先走っていたのだ。ひと言で言えば、俳優の君が役中人物の衣を着て、ぶざまな姿を見せびらかしていただけなのさ」

新人俳優は、演技の稽古を繰り返しているうちに、役中人物の行動のあり方も生活も忘却してしまい、まごまごしていた自分の胸中を見抜いた朴基柱の忠告にこうべを垂れた。

「朴基柱さん、それじゃぼくはどうしたらいいんでしょうか」

「旨い料理を作ることだよ」

「え？」

新人俳優は驚いて目を見開き、朴基柱を凝視した。

朴基柱はその胸中を察して、ゆっくりと話した。

「自立的な創造者である俳優が、確固としたわが意図を表現するには、カメラを通して役中人物の人となり

を自らの演技をもって観客に理解させなければならないのだよ」

言わば、俳優は自分の演ずる役中人物を、性格の変化の論理に即して描き、ボールをゴールに間違いなくシュートすべく、どのシーンではゴールキーパーになり、また他のあるシーンではフルバック、攻撃手などになるという演技計画を具体的に立てていなければならないということである。彼はこう語った後、自分のノートを出して見せた。そこにはこの映画のわが演技に関する各シーンの全般的な計画が表にしてまとめられてあった。表には赤色、青色その他さまざまの標識が付いていた。

このように朴基柱は、映画のいかなる人物を演ずるにしても、このような表を丹念に作成していた。それはわが演技の全般に関する設計図であった。

こうして朴基柱は、カメラの前で、ある時は後退し、ある時は迂回路を回り、またある時は他に先駆けて前進することで役中人物の性格の骨組みを作り、決定的なシーンでは得点名手さながらに決定的な攻撃をかけたものである。

新人俳優は彼の説明にいたく感動し、シーンの違いに応じた人物の演技をいかになすべきかという糸口を見つけた。

作品の各シーンにおける演技の構想表——これは演技における得点名手になるべき重要な手段であった。

名演技をめざして

高度の芸術的才能に恵まれた俳優だけが、観客の期待するすぐれた演技を見せることができるのである。

一時朴基柱には、演技には個性がなければならないとして、あまりにもごまごましたディテールをもって自分を表現しようと努めたこともあったし、ごく部分的とはいえ、生活の本質を忘却して不正常な現象やゆがんだ性格に興味をひかれたこともあった。

こうしたことが真の芸術的才能であり得ないということを、彼は劇映画『わたしが見た国』の主人公を演じる中ではっきりと悟った。

主人公高橋が朝鮮の少年少女たちの迎春公演を観覧後のモノローグのシーンで、朴基柱は、管弦楽が響き、拍手喝采が起きる中で、高橋もひどく感動しているはずだとして、大げさに首を振り、足を踏み鳴らしながら大声で賛嘆するというふうに演技を行った。それに日本の歌舞伎に見られるような行動の細部を表現するとして、過度に細かい身振りに流れ、手を額に当てるなど、インテリらしからぬあまり上品でないしぐさも、日本的だとして織り込んだのである。

しかし朴基柱は、人物の性格を個性化するとして演技を誇張するのは正しくない、ユニークな演技、個性的なディテールは、なんらかのアブノーマルな生活を描くことに目的があるのではなく、役中人物の性格と生活の論理に合

劇映画『君にささげる交響詩』のシーン

致したものを選択することによってのみ成功が約束されるものだということをはっきりと悟るようになった。

それ以来彼は、自分の癖として固まっていた細かい行動に対する過度の執着を抑制し、役中人物の性格を個性的かつユニークに表現すべく大いに努めた。こうして彼は、多部作劇映画『民族と運命』の車弘基編で、観客を感動させる名演技を見せたのである。

朴基柱は、豊かな芸術的才能を身につけるべく、技能の上達をめざして精魂を傾け、技量の発表会に積極的に参加した。

ある人たちは朴基柱を評して、天性的に俳優の素質を備えた人物だとしているが、必ずしもそうだとばかりは

言えないであろう。もっとも、彼は理性的な面よりも感性的な面が強かったとは言えようが、注目すべきは努力家、情熱家だったという点である。

彼は、撮影所ではもとより、わが子たちと連れ立って散歩をしたり、家に妻が留守だったりして台所仕事をする場合も、それらを技量を伸ばす機会として利用した。

朴基柱が劇映画『君にささげる交響詩』で、ある監獄の課長役を演ずることになった時、彼はわが家の小さいトイレに入り、そこでセリフを声を出して練習した。

そんな父親を見て、長男がなんのためにそんな狭いトイレの中で稽古をするのかと聞いた。すると彼は、監獄に漂う悪臭を多少なりとも体験してみようと思ってなと、笑って言った。

長男は、でもセリフのようなものは部屋に座って練習しても良かろうに、そこまでする必要があるのですかと聞き返した。

これに対して朴基柱は、動作とセリフを有機的に密着させないと、役中人物の感情も行動も本物として表現できないのだよと言って、稽古に熱中した。

朴基柱は、俳優生活を始めた初期から、技量の発表会に積極的に参加し、情熱家だとして撮影所中の注目を浴びたものである。

朴基柱がいないと面白くないと言われたほど彼は、技量の発表会に熱心に参加し、そこで実に多くのことを学び、実力を一歩一歩高めていった。

朴基柱の芸術的才能は、創作的思索を深めていく中でいよいよ豊かになった。

思索に思索を重ね、さらに思索を続けること、これは朴基柱の創作生活における必須の習慣として固まっていた。

彼の創作的な思索は常に、時代の巨大な流れと複雑多端な生活の中で意味ある人間の性格を見出し、それを演技に具現するための妙術を探求する方向へと向けられた。同時にそれは、いかにすれば自分の演ずる人物が観客の共感を呼ぶかということに集中された。

彼の創作的な思索は、はたから見ると度がすぎると思えるほど粘り強く執拗であった。

彼は、他人なら一度読んだら投げ出してしまうような本でも2度、3度と読み返し、読書中に抱いた疑問はすべてそれが解けるまで考えないと気が済まないという性分の持ち主だった。

いつだったか、中学生の次男が借りてきた『世界のユーモア集』を夜を明かしながら読んだことがあった。

ところが本を読みながらも大した面白味を覚えないのである。わが子が読んで大声で笑うことがたびたびあったが、彼はそんな笑い話もただ内容に機知があると思う程度で、声を上げて笑うほどのものではなかった。

中には興味もなく、ばからしくて腹立たしいものさえあった。彼は、こんなものがユーモアかと思って本を投げ出してしまい、しばらく考えてみた。

他人はみな面白おかしくて笑うのに、なぜおれには面

白く思えないのか。ひょっとしたらおれの知性が低くて笑いの神経が麻痺しているのではなかろうか。現代医学は、笑いは人間にとってたいそう重要なものであり、運動とほとんど変わりのないものだと見、それは音楽と運動の結合体だと説いている。けれども、無理に笑うことなどはできるものではない。

あれこれ考えてもどうにも納得がいかず、やはり自分は尋常な性格の持ち主じゃないようだと思いながらも、そのユーモア集をかばんに入れて数日間持ち歩き、自分一人いる時に本を開き、注意深く読んでみては、自問自答した。

ある毒舌家は、ユーモアを好んで口にする人間は聞き手を見下す者たちだと酷評しているが、ユーモアはつまるところ読み手や聞き手の気分を愉快にさせるものであるから、それを卑下するのは間違っている。だからユーモアというものは、話し手が聞き手に対し、ある一定の関心、親しみを抱いて語りかけているものだと言えよう。……

朴基柱はユーモアを口にすることのない、いささか沈うつな性格の持ち主ではあったが、内実は人情深く、人々を真情をもって遇することを常としていた。そんな性格の持ち主であったからこそ、他人が笑うとしてそれに追従しばか笑いをするようなことがなかっただけなのである。

そうした意味で、事物・現象に対する彼の思索や探求の精神がいかに強かったかということがよく分かると言えよう。

このように朴基柱の俳優生活は一貫して、創作的な思索と結びついた日々であった。

5．多部作劇映画『民族と運命』の主役を演じて

役中人物の把握

朝鮮の劇映画における成功作として万人の感動を呼んだ多部作劇映画『民族と運命』での朴基柱の名演技は、人々に大きな感銘を与えている。

彼はこの映画の第6部と第7部で、主人公車弘基(元南朝鮮軍軍団長、のちに国際テコンドー連盟総裁)役を演じて、人々を驚嘆させた。観客はこの映画を通して、実在の崔泓熙(チェホンヒ)をまざまざと見たのである。

最初この役を振り当てられた時、朴基柱は不安が先立って思い悩み、どうしても自信がつかなかった。というのは、この多部作劇映画の先行部の主役を演じた俳優たちの演技が想像以上に洗練されていたからである。

例えば、第1部～第4部崔賢徳(チェヒョンドク)(朝鮮戦争時南朝鮮軍師団長、のちに西ドイツ駐在南朝鮮大使、在米培達民族会会長)編の主演俳優は、その特色ある演技により、金正日国防委員長の大きな評価を受けていた。その俳優は、

嗚咽したり、または笑うなどのしぐさもなまなましく演じ、20代の青年から70代の老人に至るまでの感情・情緒や行動もそつなく描出して、観客を魅了した。それに彼はたくましい骨格の持ち主で、きらきらした瞳、マスクの太い線など、身体の造りも有利であった。

ところが朴基柱の場合はこれとは対照的である。

役中人物は涙と笑いもあまりなく、相対的に行動演技が際立っており、朴基柱の身体的条件も崔賢徳役を演じた俳優より大きく劣っている。

もっとも彼は、この映画の第1部～第4部に車弘基役をもって出演し、その人物を一応そつなく演じていた。彼はここで幾つかのシーンに登場したにすぎなかったが、車弘基の性格を部分的にしろリアルに表現することに成功していた。けれども、それらはあくまでも脇役であり、主役ではなかった。

もし、彼がその連続編第6部と第7部で、主人公車弘基役を崔賢徳役に劣らぬだけのレベルで演じることができないと、自分がそれまでに達成した実りまで光彩を失ってしまうことになる。言うなれば、俳優としてのわが運命がこの映画により左右されるのである。

彼の苦悩は、制作スタッフにも伝わり、映画の制作を間近にして、彼らの関心は一様に朴基柱に向けられた。

そんな時、朴基柱が車弘基役を振り当てられて非常に心配しているということを聞いた金正日国防委員長は大きくうなずき、そんな心情ならむしろ期待が持てる、少しも心配することなく気持ちを落ち着けてカメラに向かうことだとし、主人公の性格を深く把握し、演技の細部にも深く心を致すようにすべきだと教えた。

大きな信頼のこもる国防委員長の激励の言葉を伝え聞いた朴基柱は、自分に向けられた国防委員長の関心は今なお大きいとしみじみと感じ、必ずやその期待に応えんものと決心した。

朴基柱は、車弘基の内面世界を分析し、把握することに大きな力を入れた。

車弘基の内面世界における基本は、国を愛し、民族のために尽くそうという志向であった。

車弘基は国と民族を愛し、同時に反共を理念としている点では崔賢徳と共通していたが、そこには一定の違いがあった。

崔賢徳は、民族のために尽くす道は、あくまでも反共にあると確信していた。

他方、車弘基の愛国心、民族愛はテコンドーと強くかかわっていた。彼はテコンドーには民族の魂が深く宿っているとみなし、それを一切の政治的理念の上に据えていた。

彼は自らのすべての行動を民族の誇りであるテコンドーを輝かせ、そのことを通して民族の大団結を遂げ、分断祖国の統一を果たさんものと念願した。

国を愛し、民族のために尽くすための生き方について、車弘基と崔賢徳には違いがあったように、反共の理念も同じではなかった。

崔賢徳の反共理念はその最初から極端に凝り固まっていた。彼には共産主義を正当に理解する機会が皆無であった。彼は極端な反共意識を注入され、資本主義社会の風に深く染まることで、それはいっそう固まってしまった。

ところが、車弘基は最初から反共理念を抱いていたのではなかった。彼は共産主義に共感し、北の地で共青活動にも進んで従事していた。彼は、自分を冒涜した偏狭なえせ共産主義者の不当な処置に憤慨して反共に変身した人物であった。そんな彼であったので、北の政治を頭から否定し誹謗していたわけではなく、それなりに肯定もしていた。

それゆえ彼は、テコンドー師範たちを前にしてわが人生を振り返り、自分は国と民族を愛そうと努めてきたが、わが運命と民族の運命の間にはずれが生じ、摩擦さえ余儀なくされたと慨嘆しながら心理的な苦痛に身もだえするのである。このように彼の内面世界には、国と民族への無限

の愛の思想・感情とともに、本意ならずもその愛とは裏腹に生きたという罪の意識が色濃く宿っているのであった。

朴基柱は、車弘基のこのように複雑な内面世界の特徴を深く分析し、把握することで、大統領朴正熙（パクチョンヒ）を憎悪しながら豪雨に濡れたぬかるみの道を歩むシーンをはじめ、作品の全般にわたりユニークな個性に富んだ演技を演じることで、観客に深い感銘を与えたのである。

朴基柱は、車弘基の内面世界とともに彼の個性的な性向と気質をしっかり把握すべく努力した。

シナリオにある車弘基の個性的な性向と気質は、要約すれば寡黙で、男らしい人間だと言える。これはある意味では俳優朴基柱の個性、俳優的な個性に通じていると言えるものであった。

朴基柱は、演技において、できる限りセリフは少なくし、行動に重きをおいた。台本にあるセリフであっても、省略すべきは省略した。

その具体的な例は、車弘基が朴正熙（1963年12月から南朝鮮中央情報部長金在圭（キムジェギュ）の狙撃で殺される1979年10月26日までの16年間、第5代～第9代大統領）を憎悪し、たもとを分かつことを決心するシーンではっきりと見ることができる。

当時の連隊長全斗煥の告白から、自分に対する朴正熙

の陰謀を知った車弘基は、雨に濡れながらよろめきよろめき歩いている。

豪雨で濁水が流れる泥道をとぼとぼ歩く姿、苦悶にもだえて充血した目、雨に打たれて乱れた頭髪、酷くゆがんだ唇、やがて大木の幹にすがり、今にもくず折れそうになって身を震わせる不安定な姿勢、震える手で胸を叩き、雨に濡れた顔を拭う荒っぽい手の動き、不意に肩の将官階級章をもぎ取り、ぬかるみの道に叩き捨てる行為、暗雲に覆われた空をぼんやりと見上げる苦悩に満ちた表情……。

このような車弘基の姿は、朴正熙にだまされ、裏切られたことへの悔しさと憤りだけではなく、そのような醜い人間を愛国者、あらゆる悪の巣窟南朝鮮をわが祖国と信じていたおのれに対する虚無感と屈辱感、慨嘆と苦悩、反省と自責であるとともに、民族分裂の元凶朴正熙への憎悪と呪い、反発と決別を意味するものであった。

朴基柱は、車弘基の性格の特徴を正確につかむべく、彼の外的な特徴も深く研究した。

とりわけ車弘基は普通のどこにでも見られる人物ではなく、テコンドーの名ある元老であり、典型的な運動家タイプの人物であると見る時、原型人物の外的な把握は決しておろそかにできない重要な問題だと言えた。

「1918年生まれ。幼い頃から背が低く、目は細く、体

は小柄で、叔父から護身術としてテコンドーを学んだ。国の解放前、日本軍に徴集され、鎮海、平壌などで1年余り徴兵生活をした。徴兵生活中日本軍少尉を殺し、1年近く山中にて逃避生活を送る。

国の解放後、生まれ故郷の咸鏡北道花台郡にて面の共青書記を務めていたが、郡党書記と意見が合わず、南へ逃走。

その後崔徳新（多部作劇映画『民族と運命』第1部～第4部の崔賢徳の原型人物）とともに南朝鮮の士官学校に学び、卒業後米国の軍事大学の研修生として留学中朝鮮戦争が勃発。

戦時に南朝鮮軍師団長として永坪地区（崔徳新は大田地区）で戦い、戦後は軍団長を務め、一時マレーシア大使。

軍団長時代に南朝鮮テコンドー連盟を作り、会長に就任。

その当時、朴正熙の謀略で身に危険が迫っていることを知り、カナダに亡命し、ここで国際テコンドー連盟を結成して総裁に就任した。彼は世界的にかつてなかった唯一のテコンドー9段の称を得た。

妻との間柄はおしどり夫婦と言われたほどの仲である。

数度にわたり祖国の共和国を訪れ、金日成主席の接見を受けた。

故郷に親類がいる」

以上の原型人物の経歴と、彼が執筆した全15巻の図書

『テコンドー』が、朴基柱の手に渡された原型人物についての基礎的な資料であった。

これらの資料をもって朴基柱は研究に研究を重ねた。

まず第一に、実在している原型の姿を表現するには、当の人物のそれと同様に似せて、わが姿形をできる限り変形させせなければならなかった。

自分の顔の造りで原型の形態とほぼ共通しているのは、目であった。その細い目と高い頬骨を除いては、似ているところがほとんどなかった。

丈も原型人物より13センチも高かったし、唇も分厚く、顔面も広かった。

けれども彼は、出演家たちも認めていたように、現在の朝鮮人俳優の中では原型人物と姿形が一番近かったので、この点では自信が持てた。

そこで彼はメーキャップ師の助けを借りて、原型人物に近い姿に扮装すべく努めた。その結果、制作スタッフの中では、「似たところがある」「似ている」という評が上がった。

次に力を入れたのは、テコンドーに習熟することと、職業軍人らしい歩き方や姿勢であった。

彼は日本にいた時、日本の子たちと喧嘩しても負けまいとして6カ月ほど自費で柔道の道場に通ったことが

あった。けれどもこのことで安心しているわけにはいかなかった。テコンドーと柔道は動きがまるで違っているのである。それで彼はテコンドー師範の指導を熱心に受け、わずか15日にしてテコンドーの基本的な動作をそつなく行えるほどになった。

さらに彼は、原型人物崔泓熙の祖国訪問を収録したビデオを見ながら、その控えめな身振りや歩き方、さらには目の光に至るまで詳細に把握すべく努めた。

こうして、原型人物の外的な特徴をその性格と状況に即して生かし、主人公の性格を印象深く描き出すことに成功したのであった。

例えば、第6部における車弘基軍団の広場で、主人公車弘基がテコンドーの練習を指導する洪栄子（ホンヨンジャ）に「うむ、洪師範の腕をひとつ見てみようか」と言い、彼女の相次ぐ攻撃を防ぐ時に見せる巧みなテコンドーの動作は、まさに洗練された機敏なテコンドー選手そのものであった。またテコンドーの屋内道場で、憤慨した車弘基軍団長が全斗煥連隊長（のちの大統領）の前へつかつかと歩み寄り、不意に身を躍らせて蹴り、床に叩きのめす演技も真に迫っていた。

このシーンで、フィルムを継ぎ合わせる2、3の連結画面を除くほとんどの動きは、彼のじかのテコンドー動作

によるものであったがゆえに、生き生きとした演技が生み出されたのである。

他方、第7部の車弘基軍団の広場で、手足を振るって練習する師範たちを威厳のこもったまなざしで眺める軍団長の不動の姿勢と謹厳な瞳は、役中人物の外的な特徴をリアルに描き出している。

また、夜が明ける頃、前線の陣地で、麾下軍団の1個中隊が「共産軍の襲撃を受けて全滅した」という報告を受けて、火のついた虎のように激しく立ち回る姿は、戦いしか知らぬ過激な軍人的気質をリアルに描き出している。

役中人物の外的な特徴を見せる朴基柱の演技がどれほど生き生きとしていたかは、原型の人物崔泓熙が夫人とともに祖国を訪れた際、この映画を3度も繰り返して見、その度に興奮し、映画俳優がわたしの振る舞いをそんなにも見事に演じるとは、不思議というほかないと嘆じてやまなかった。

崔泓熙の子息であるカナダ在住の崔重華（チェジュンファ）（国際テコンドー連盟事務局のメンバー）とその同僚たちもこの映画を見て、俳優が役中人物を食べて本物を吐き出した、姿形も行動も崔泓熙総裁そのものだと感嘆して、感謝の手紙を朴基柱に送ったという。

性格と状況に即して

人物の性格と状況にぴったりした演技は、人物がその状況ではただそのようにしか他には行動し得ないユニークで個性的な行動、つまりその思想・感情と志向に合致した行動として表現されなければならない。

多部作劇映画『民族と運命』第6部と第7部における朴基柱の演技は、そうした意味でも実践的な模範だと言える。

その例の一つは、第7部において朴正熙が車弘基軍団のテコンドーの練習場にやって来た時の、主人公の行動に明確に表現されている。

車弘基が、テコンドーをもって民族の魂を立ち直らせてその力を大きく養い、分断祖国を必ず統一させるとし、朴正熙を独裁者、アメリカの侍女だとののしったということ、第一線の諸軍団の中で今、テコンドーが恐るべき勢いで力を伸ばしているということを洪栄子の秘かな報告によって知った朴正熙は不安に駆られて、車弘基軍団の視察におもむく。

とはいえ視察は名目にすぎず、本心は車弘基の動静とその反政府的な傾向をわが目でじかに確かめようということにあった。

台本にはこの場面を、「乗用車から降りる朴正熙、報告する車弘基、査閲台に上がる朴正熙」となっている。

ここには車弘基の行動について具体的な叙述はなく、ただ不動の姿勢が念頭におかれているのみであった。

ところが俳優は、査閲台に立った朴正熙に目を向けた瞬間、目に不快な色をちらっと走らせることで、主人公の心理をかいま見せたのである。

それは瞬間的な演技ではあったが、俳優は、この奸智に長けた朴正熙がなんのためこの軍団にのこのこやって来たのか、本当に前線の視察なのか、それとも何か疑惑を覚えてのことかという車弘基の複雑かつ微妙な心理を、その一瞥によりまざまざと表現している。と同時にそれは、朴正熙の先輩としての車弘基の自尊心と、男らしい毅然とした意気と鋭敏な性格的特長をリアルに描出している。

そのあと、車弘基の視線は前方のある一点に注がれていた。理性的ながらも、冷たく鋭いその眼光は、錯雑としながらも微妙なおのが気持ちを静め、整えようと努め、今にどんな事態が生ずるか見てみようとしている車弘基のデリケートな心理を見せている。

他の俳優ならば、このシーンには車弘基の演技で特別なものを見せるほどのことはないとして、平面的な動きに終始したであろう。

ところが朴基柱はこの5、6秒ほどにしかならない場面ではあったが、その場の状況と契機を逸することなく、本人のみが見せうる独特な行動を探究することで、主人公の複雑微妙な心理状態をいかんなく描出したのである。

車弘基に見られる独特な動作は、第7部における、妻申（シン）タルレと久し振りに会うシーンで集中的に表現されている。

政治的詐欺師朴正熙の思いもよらぬペテンに掛けられていたと知った車弘基は、耐え難い憤りに歯ぎしりする。降りすさぶ風雨に打たれながら軍団長の階級章をもぎ取り、身震いしていた彼の足は知らず知らずのうちにわが家に向かう。そこには愛する妻と娘がわびしげに留守を守っているだろうが、彼は雨の降りしきる庭で立ち止まり、ベンチに腰を下ろして黙然と思いにふける。

お父さんが帰ってきたという娘順姫（スンヒ）の叫び声を聞き、庭へあたふたと駆け出たタルレは、娘の目には気にもかけず夫にすがりつき、きっと帰ってくると信じていたと、涙を流しながら語る。

ではこのシーンで一言も発せずに座り続けている主人公の行動が、観客を強い情緒的感情にひたらせ惹きつけたのはなぜだろうか。

それは、車弘基の静かな行動に強い劇性が内包されているからであった。彼はその反共理念のゆえに、久しい間妻を苦しめ続けた。タルレの心を占める祖国への思い、理念は何物をもってしても崩すことができないものであった。彼女は祖国について抱いている自分の理念は国を愛し、民族に尽くす思想だと強く信じていた。

タルレは車弘基によって強圧的に夫婦関係を結ぶことになったが、車弘基は妻の信念をくつがえすことができ

なかった。反共の理念が音を立てて崩れた今になって車弘基は、妻に対する罪の意識に急激に捉われた。とはいえ、妻の前であえて自分の反省の言葉を述べるのがはばかれたのは、あまりにも長い間彼女に精神的な苦痛を強いたからであった。

車弘基の胸中に充満している妻への罪の意識は、それまでタルレの愛情のこもる切なげな訴えにも、譴責にも微動だにせずあくまでも反共の道を歩み続けたわが人生行路に対する罪の意識であり、民族の前に犯した罪悪意識であった。それゆえにこそ車弘基は、温かい部屋の明かりが早くお出でと呼んでいるように思えながらも、自責の念と後悔に駆られて、いつまでも庭にじっと座ったまま雨に打たれていたのである。

気位の高い妻が自分をどう迎え入れてくれるだろうか、くだらない人間だとして見向きもしないのではなかろうか。……

ところが、庭へ駆け出たタルレは車弘基にぱっとしがみついたのである。この思いもよらなかった妻の行為に車弘基は驚きまごついたが、すぐに、タルレが自分そのものを毛嫌いしていたのではなかったと悟り、胸がこみ上げて妻を強く抱きしめる。

この場面の俳優の演技は、車弘基の性格の論理に合致していると言える。

車弘基は人一倍自尊心が強く、テコンドーをもって民

族の尊厳を高めようとする愛国心も強かった。

それほど気概のある彼だったから、共青熱誠者大会への参加を許さないえせ共産主義者であった郡党書記の処置に反発し、彼を叩きのめし、羞恥感も手伝って、恋人タルレの制止も振り切り、南の地へ去る極端な行動をあえてしたのである。

権力を振る舞い、権謀術数と悪行をこととする朴正熙にも頭を下げようとしない自尊心の強い車弘基が、妻の前でうなだれたのは、妻の理念に無意識的に惹かれていたからであった。

長年曲折に満ちた道を歩みながらも、権力にこびたことのない彼の自尊心は、忍耐強さと寡黙な性格を形づくった。

そんな人物が、妻に対して突発的な行動を演じたとしたら、車弘基の性格がここで破綻してしまうことになる。

だから俳優は、庭に黙然として座り、雨に打たれながら頭を垂れて妻に会うという演技を行ったと見られるのである。

朴基柱は多部作劇映画『民族と運命』で、テコンドーに関して洪栄子と電話で対話するシーン、脱走兵たちを処刑するシーン、遊覧船上で朴正熙と5・16クーデターについて談話を交わすシーン、軍団長に昇格して帰宅し、妻から思いがけない冷遇を受けるシーン、軍団長室で洪栄子と故郷への思い出を語るシーンなどで洗練されたユニークな演技を見せた。

個性的な細部演技

多部作劇映画『民族と運命』の車弘基編で朴基柱の演技が成功し、彼が一躍名だたる俳優として絶賛を浴び得たのは、細部演技を重視し、それを個性的、創造的に演じたこととも大いに関連している。

朴基柱の行動の細部演技は、たばこを用いて車弘基の性格の特性を集約的に見せることで生き生きと表出された。

車弘基にとってテコンドーは民族の魂であり、精神的信念、良心であった。ところが車弘基の生活は、その一つ一つが民族の運命と食い違い、摩擦するために、疑惑と不安、苦悶がつきまとう。そんな中でも彼は、テコンドーを身につけた男らしく、わが精神的なとりでを守っていく。

他方、兵士たちの中に急速な広がりを見せているテコンドーの勢力に脅威を覚えた朴正熙は、車弘基を排除すべく狡猾、邪悪な陰謀を企てる。

それとも知らず車弘基は、民族のために朴正熙を大統領に押し立てれば、国の繁栄を果たせるとして、積極的に彼を支持していたのである。そんな彼だったからこそ、前線の中隊が「共産軍の襲撃を受けた」という出来事の真相を知った時、朴正熙にずっとあざむかれ続けたことへの憤怒とうっぷんを抑えることができなかった。

朴基柱はその時の複雑な心理を、細部演技をもってリアルに演じたのである。

朴基柱は、車弘基の精神的な苦痛と、麾下の中隊を襲撃した張本人たちへの呪いを、吸っていたたばこの火をテコンドーの精神がこもるわがこぶしの甲に押し付けてもみ消す行為をもって表現したのであった。

このたばこの火は、主人公が民族に背を向けて生きてきたおのれの心臓を焼き尽くし灰にしてしまったのだと思えるような感を観客に与える。いわばこの行為は、テコンドーをもって民族の運命を救おうとした車弘基がわが愚かな精神的意志を焼き尽くしてしまおうとして取った行為であったと見るべきであろう。それはまた長年抱き続けたテコンドーによる祖国統一の理念を無念やる方なく放棄するほかなくなった時の苦しい思いを寡黙ながらも男らしい行為をもってまざまざと表現したものでもあった。

このように特色ある個性的な、深い意味のこもる朴基柱のこの演技は、決してたやすくなされたものではない。

最初彼は、手の甲に薄いアルミ板の小片を付けてみたり、ビニール接着剤を厚く塗ったりしてたばこの火をもみ消してみた。けれどもそんなやり方ではカメラをごまかせず、演技も真に迫ったものになれなかった。そこで火の消えたたばこを手の甲に押し付けることで観客の目をごまかせるかも知れないとして、まず撮影中たばこを吸っている場面を見せ、ここでカメラを止めておいて、火の消えたたばこに持ち変えてからカメラを回して、手の甲に押し付け火をもみ消すような演技をしてみせようかとも思った。しかし、実際にそんなふうにしてみると、手の甲から火の粉ならぬ黒い灰が落ちるだけだったので、ごまかしの演技だということがすぐにばれてしまった。

そんなごまかしをもって演技を行うのは思わしくないとして考えあぐねていた朴基柱は、映画は虚偽を嫌い、許しはしないと教えた金正日国防委員長の言葉をはっと思い出した。

多部作劇映画『民族と運命』の真実性を高いレベルで見せるべく努めなければならない俳優たる自分が、手の甲にちょっとしたやけどができるのを恐れて、ごまかしばかり考えていたとしておのれを叱責した。こうして朴基柱は浅薄な欺瞞策を振り切り、わが手の甲に火のついたたばこをじかに押し付けて、リアルな演技を見せたのであった。

朴基柱は、車弘基が朴正熙を呪い、自分の階級章をもぎ取って捨てる行動の細部演技もリアルに演じている。

映画のその一連のシーンを台本によって見てみよう。

「テコンドーの屋内道場で、車弘基が全斗煥の胸ぐらをつかんで立ち上がらせる。

『おい、亨郁(南朝鮮中央情報部長)の後ろに、またいるだろう』
白状する全斗煥。
『朴…正…熙』
驚く弘基。
『朴正熙だと？』
疑惑に駆られて問い返す車弘基。
聞いて聞かぬふりをする洪栄子。
車弘基：『朴正熙きゃつが……』

多部作劇映画『民族と運命』のシーン

外へ出て行く車弘基。
洪栄子：『軍団長……』
車弘基：『二度とこのいまわしい南韓の地で、車弘基に会おうなどと思うな』
……
街、雨の中を歩く車弘基。車弘基の顔に稲妻が走る。
身震いする車弘基。
『朴正熙、貴様が、よもやこんなにも陰謀に長けた人間だとは知らなかった。あー、あ！』
また走る稲妻。
木の幹をつかんで絶叫する車弘基。
『貴様がこの車弘基を排除する？　国軍創建者の一人であるこのおれを一体どうしようというのだ、野郎』
身震いする車弘基。
『こんな民族の悲劇がまたとあろうか、あー』
階級章をもぎ取る車弘基。
冷たい雨に打たれながら歩き出す車弘基」
映画のシーンは、絶叫し続ける内面世界から戦慄する身震いへと変じ、遂に両肩の将官階級章をもぎ取る演技へと深まりを見せていく。
ここで俳優は、階級章を単純にもぎ取ることで演技を済ませてはいない。

左の肩にゆるゆると上がっていく右手は、あたかも千鈞の重量物を上げているかのようであり、階級章をもぎ取る行動は、何か汚らわしい物を払い落とすかのような、かなり急速な動きであった。

そのあと階級章を地面に叩きつける行動は、重みに満ちていた。

ついで右の肩に上げていく左手は、前と同様にゆるゆると上がり、階級章をもぎ取る動作もかなりゆっくりとし、泥道に捨てる動作にも力が入れられていない。

俳優のこうした演技は、陰謀家、極悪なファッショ暴君朴正熙への呪詛と憤怒、耐え難いうっぷんと敵愾心の絶頂として、これまで朴正熙にたぶらかされながら生きてきた人間の内面の心理をリアルに見せている。と同時にそれは、寡黙で男らしい決断力ある車弘基の気質的な側面をユニークに際立たせることに成功した行動演技でもあった。

この映画で観客に深い印象を与えた個性的な行動細部演技、印象的な心理細部演技は、以上のほかにも多い。

出演した役中人物のそれぞれにぴったりした個性的な演技を見せることで観客に愛されてきた朴基柱は、朝鮮文学芸術の輝かしい総括作である多部作劇映画『民族と運命』車弘基編で万民の心を捉えた、魅力ある演技を見せたことで、1992年12月25日、人民俳優の称号を授けられた。

誉れ高き栄誉

1992年4月28日は、朴基柱にとって生涯忘れ難い日であった。

その早朝彼は、朝鮮劇映画撮影所から、早く撮影所に来るようにとの電話を受けた。彼はまだ夜が明けてもいないのに何事だろうかといぶかりながら撮影所に向かった。ところで、そこには撮影所の責任幹部が車の前で彼を待っていたのである。

やがて車が動き出した時、彼は責任幹部から金正日国防委員長のお呼びを受けたと聞かされた。この夢のような話に彼は興奮し、感激した。平壌演劇映画大学を出てから朝鮮劇映画撮影所に入り、多部作劇映画『民族と運命』に出演したこれまでの長い年月に、国防委員長にじかに呼ばれたのは初めてのことだった。

他のシナリオ作家やアーチストとともに党中央委員会に到着し、国防委員長の執務室に案内された朴基柱は、胸に熱いものがこみあげた。全国の人民が寝に就き、彼らが眠りから覚める頃の明け方までも、積み上げられた文書に目を通している国防委員長の姿に接し、涙を抑えることができなかった。

金正日国防委員長がこの夜も一睡もせずに明かされたと思うと、自分はそんなことにも考え及ばず、早い朝に起こされたとこぼしながらわが家をあとにしたことが深く反省された。

一同が執務室に入ると、国防委員長は明るい微笑を浮かべて立ち上がり、かいらい軍の軍団長がどうやってここへ現れたのかね、でも金日成同志の懐に抱かれた軍団長だから喜んで迎え入れなければならん、と言って、朴基柱の手を温かく取り、肩を叩いた。

国防委員長は続けて、多部作劇映画『民族と運命』第6部と第7部を楽しく見た、主人公車弘基役を担当したあなたは、演技を実に立派に、すばらしく演じた、軍団長役を見事に演じたとたたえた。

そして、車弘基が「朴正煕、あの野郎」と呟きながら肩の将官階級章をもぎ取り、空を仰ぎ見ながらぬかるみを歩む場面の演技はまことにリアルそのものだった、自分の将官階級章をもぎ取る場面の演技は、まさに名演技だ、車弘基が「今後貴様には仕えはせん。わしは去る。二度と再びこの南韓の地でおれに会ってみようとは思うな」と叫び、朴正煕と決別するシーンは、見るほどに立派だったとたたえた。

また、朴正煕がテコンドーの練習場にやって来たシーン

で、朴正煕をちらっと見る車弘基の目には、その感情が極めて細やかに、リアルに表現されていたと大きく評価した。

国防委員長の身に余る評価を受けた朴基柱は、なんと答えてよいか分からず、ただじっとうつむいていた。

そんな彼に情のこもる目を向けていた国防委員長は、以前劇映画撮影所の俳優団が風刺劇『補充兵』を作り公演を行った際に、あなたは脇役の補充兵を演じた、あなたはこれまで映画の脇役を多く演じ、主役はあまり演じていない、ところが今回劇映画『民族と運命』第6部と第7部で車弘基役を実に立派に演じたとたたえ、それ以前の演技についても言及した。

実際、朴基柱は風刺劇『補充兵』に出演して以来、国防委員長の細心の指導を受けていた。

1969年に入ってから朝鮮劇映画撮影所では、俳優たちが国防委員長の発意と指導を得て、舞台公演の稽古に熱中していた。

国防委員長は、舞台公演を通して映画俳優たちの芸術的技量を高度に伸ばすことを目的にし、その一つとして風刺劇『補充兵』を創作し、公演するようにしたのである。

劇映画『血の海』の制作中、日本軍の蛮行により村

が火の海、血の海になるシーンのロケーションを指導すべく現場を訪れた国防委員長は、俳優たちの中にいる朴基柱を認めて、その手を温かく取り、今度はどんな役を演じているかと尋ねた。大勢の端役ですという返答に、作品の思想・芸術性を高める上でわずかの欠点も表れないようにするには大勢の端役も粗末に演技すべきではないとし、責任感を持って熱心に参加するようにと激励した。

1971年10月に行われた技量発表会で一幕劇『ここも前線だ』を見た国防委員長は、朴基柱が老人役をいかにももっともらしく演じた、風刺劇『補充兵』を作っていた時のことが思い出されると、また当時のことを振り返ったものである。

国防委員長は執務室で、未だにかさぶたが残っている朴基柱の手の甲のやけどの跡を見て、これは朴正熙に対する怒りをこらえきれなかった車弘基の内面世界を表現すべく、たばこの火をもみ消した時のやけどの跡かと聞いた。そして、やけどの跡をなでながら、あなたは今回役中人物の演技を立派に行うべく、たばこの火を手の甲にもみ消してやけどを負ったが、俳優が演技を生き生きと演ずるには、そのような情熱がなくてはならないと言った。

今にして思い返してみると、朴基柱は多部作劇映画

『民族と運命』の出演をするまでは、まだ多方面的な名優として大きく認められるまでには至っていなかった。それまで朴基柱が演じた役にしろ、その小柄な体格やマスクにしても、車弘基のように重みのある人物の役を全うしうるとは誰一人確信し得なかった。

そんなわけで当初制作スタッフは、車弘基役を朴基柱に振り当てるべきか否かをもっていろいろと論議を交わしたが、結着をつけることができずにいた。

そうした1992年4月初めのある日、『民族と運命』崔賢徳編第4部を見て、崔賢徳を車弘基編でも時々出演させると良いだろうと言った国防委員長はふと、車弘基役は誰が演ずるのかと尋ねた。

現在朴基柱が候補に上がって

多部作劇映画
『民族と運命』のシーン

はいるが、体格がすぐれないので重みのある人物車弘基の役を果たしうるか否か確信が持てず結論を下すまでには至っていないという返答を聞いた国防委員長は、車弘基役を朴基柱が演ずると、がっしりしない彼の体格が南朝鮮軍の将官役に似合うだろうかなどとして案ずる必要はない、映画俳優は、こんな性格の人物も演じて見、あんな性格の人物も演じて見るべきで、似たような性格の人物のみを演じているようではいけないと言った。

思い返してみると、異国日本で民族的な差別と蔑視にさらされていた朴基柱が、映画俳優としての誇らしい生活を送っているのは、本人にとって夢のような喜びであった。

民族の運命は即ち個人の運命であり、金日成主席と金正日国防委員長の愛の懐に抱かれれば、民族の運命も個人の生も輝きを帯びるという多部作劇映画『民族と運命』の主題思想は、朴基柱の人生行路にもそのままあてはまっているのである。

彼の両親は、わが子を亡国の民として生み育てるほかなかったし、幼い朴基柱に古バケツを持たせ石炭拾いをさせて泣いたものだが、金正日国防委員長は彼の志向をかなえさせ、骨身にもまさる情をもって名優へと励まし押し立てるべく労を惜しまなかったのである。

国防委員長は、その年の8月のある日、今朴基柱に対する人気は大変なものだ、そのように人気が高い時に、彼が出演する連続編も続けて作り、早く上演するとよい、人気俳優が現れたら、その俳優の映画を続けて作り、そのあとで他の人物編へと移ることだと述べた。

最初2部を予定した車弘基編が5部に増やされたのは、以上のようないきさつによるものだった。

金正日国防委員長の信頼と恩情があったればこそ、朴基柱は栄光の絶頂に登り、輝かしい生を生きることができたのであった。

むすび

国の解放後、新朝鮮建設の歌声が高らかに響いていた日々に劇映画『ふるさと』が呱々の声を上げてから、朝鮮劇映画ははや70余年の年輪を刻んだ。

他方、朝鮮文学芸術の代表作と言える多部作劇映画『民族と運命』車弘基編（1992年）が制作されてからも30年以上の歳月が流れている。

時代の名作『民族と運命』の車弘基編を見た人たちは、受難の生を生きた民族の子である映画の主人公車弘基とともに、俳優朴基柱も忘れ得ないでいる。

民族の運命は即ち個人の運命であるという種子に基づいて制作されたこの映画は、民族に対し反逆の道を歩んでいた国際テコンドー連盟の総裁車弘基が晩年に至り、民族のための真正な道に踏み入る過程を感銘深く描いているが、ここで朴基柱の演技は、時代のこの名作の中で堂々たる一ページを占めている。

この映画は、朝鮮労働党と祖国に全的にわが運命をゆだねて生きた朴基柱自身の生涯の総括でもあった。

彼は晩年に至上の栄光に輝いた幸運児である。

金正日国防委員長は、わたしは朴基柱の演技に魅せられた、朴基柱もその演技をもって、男が男に魅せられるようにした、わが国の男性映画俳優の中の3大名優は崔賢徳、尹桑民（ユンサンミン）、車弘基の役を演じた俳優たちだとして、最高、最大の信任と愛を表した。

幼い頃から異郷日本の地で民族的な蔑視と差別の中で生きた朴基柱、祖国の情を渇望し、ひたすら俳優の道を志してやまなかった彼が帰国を果たし、偉大な師の指導を得て、祖国と人民に愛される人民俳優の光栄に浴し、朝鮮知識人大会（1992年）に代表として参加するという誉れにもあずかったのであった。

朴基柱は55歳を一期として生を終えた1994年7月18日まで、自分を育ててくれた朝鮮労働党と祖国に尽くすべくやむことなく創作活動を続けた。

彼は、俳優生活を始めた初期から生き終えるまで、自らの実力に満足を覚えたことがなく、常にスタートラインに立っているという心構えで創造活動に励み、努力に努力を重ねることで遂に成功の頂、幸福の絶頂に登りつめたのであった。

志向と成功

執　筆：教授・博士　肖熙朝

編　集：金永鮮、張香玉

翻　訳：金時習

発　行：朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社

発行日：チュチェ112(2023)年5月

E-mail: flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp